

4. 志々地域の後期古墳

志々地域は神戸川中・上流域では比較的まとまって古墳が見られる地域である。古墳はいずれも集落が営まれていた河岸段丘やその周辺に分布しており、背景となる地域がほぼ推定できる。

比丘尼塚古墳⁴⁰、大字八神に所在するもので、八神集落より南西側の河岸段丘上に位置している。未調査のため詳しいことは不明であるが、横穴式石室を内蔵した古墳で、墳丘は径13mほどの円墳とされ、高さは現状で1.5mである。墳丘の東から北側には幅5mの周溝が巡っている。

石室は全長7.5m、奥壁幅1.6m、石室入口幅1.1m、高さは現状で1.6mである。平面形は玄室と羨道の区別がない無袖式を呈しており、南西方向に開口している。各壁の状況は土砂に下半部が埋もれているため詳細不明であるが、奥壁は大きな1枚石を据えて、側壁との間隙を小形の石材で補っている。また、側壁は東側壁の奥壁部分で腰石らしい比較的大形の石材が使われていることが分かり、その上に3段横方向に目地を通してながら石材を積み上げている。天井石は5枚が架けられており、奥壁から石室入口に向かってやや低く傾斜している。時期については無袖式で狭長な平面形をもつことから7世紀前半代を想定しておきたい。

門古墳群⁴¹、大字志津見に所在するもので、竪穴系横口式石室を有する2基の古墳が確認されている。同一段丘上には集落遺跡も存在するが、時期的に重なっているかどうかは不明である。ともに石室のみ検出されており、墳丘は明らかになっていない。

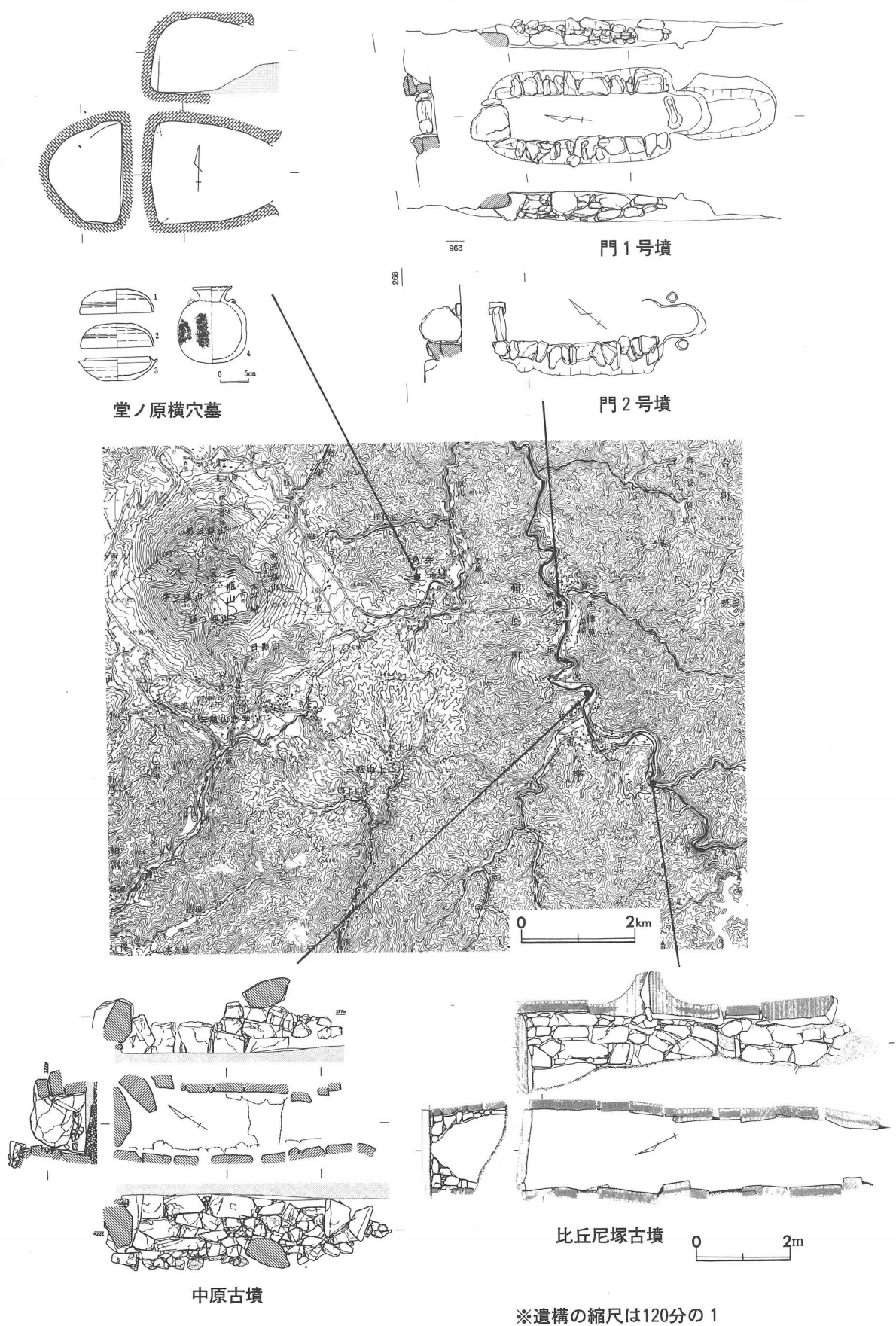
1号墳は舌状に張り出した墓道をもつ墓坑の中に石室が築かれている。石室は長さ3.3m、幅0.9m、高さは現状で0.6mである。平面形は無袖式で、奥壁は扁平な石2～3段程度小口積みにしたものと思われ、両側壁は腰石の上に2～3段に積まれている。2号墳も舌状に張り出した墓道をもつ墓坑の中に石室が築かれている。石室は長さ3.2m、高さは現状で0.9mである。平面形は無袖式で、奥壁は扁平な1枚石を立てて、側壁は腰石上に2～3段に積まれている。

門古墳群の石室は、ともに緩やかに上がる墓道を備えた墓坑の中に築かれた竪穴系横口式石室である。無袖式の竪穴系横口式石室は山陰では伯耆東部、鳥取県東伯郡地域に分布しており、時期的には6世紀後半から7世紀初めにかけて営まれたことが明らかになっている⁴²。報告書では前庭部から出土したという長頸壺からは7世紀後半という年代が与えられているが、石室の系譜の問題を含め再検討の必要がある。

堂ノ原横穴墓⁴³は、大字角井に所在するもので、なお周辺に複数基存在する可能性がある。

横穴は玄室のみ遺存しており、現状で長さ2.5m、幅2.2m、高さ1.55mである。天井の形態は判然としないが、断面三角形または丸天井になるものと思われる。出土遺物としては、須恵器蓋環・提瓶があり、6世紀後葉から末に営まれたものと考えられる。

以上、志々地区の後期古墳を概観したが、その中では八神の比丘尼塚古墳と中原古墳が横穴式石室を内蔵している点、石室の規模が大きい点で周辺地域のものに優る内容を備えている。特に、比丘尼塚古墳は墳丘規模こそ小さいが、全長7.5mに及ぶ石室を有しており、神戸川中・状流域では屈指の古墳といえる。角井の堂ノ原横穴墓や志津見の門古墳群は時期的には先行するものと考えられるが、内容・規模等から考えるとその地域の集落が背景にあると見られる。これに対し、比丘尼塚古墳と中原古墳はともに森遺跡など当地域における中心集落が存在した八神を囲むように南北に位置することから、八神を基盤とし周辺のいくつかの集落をも束ねていた村落首長墓であった可能性も考えられる。



第77図 志々地区の後期古墳